

湛睿著『随自意抄』について

道 津 綾 乃

一 本稿の目的

本稿で取り上げる『随自意抄』は、横浜市金沢区に所在する称名寺が所蔵する重要文化財である。著者・本如房湛睿（一二七一～一三四六）は、一三三九年に称名寺の第三世長老となった人物で、その事績は、古くは『律苑僧宝伝』、『招提千歳伝記』、『本朝高僧伝』⁽¹⁾等に記載され、近代に入ってからは大屋徳城氏や納富常天氏により、明らかにされている。⁽²⁾健筆で著書、書写本を多く遺すとともに、たいへんな書籍収集家であったことが、称名寺の蔵書の質と量を支えたといっても過言ではない。主著として、『華嚴五教章纂釈』、『華嚴演義鈔纂釈』、『大乘起信論義記教理鈔』、『四分律行事抄見聞集』⁽⁴⁾を提示するが、これらは皆、経論類の注釈書の注釈であるため、湛睿が仏教をどのように考えていたのかを読み解くことは難しい。また、称名寺に伝わる湛睿の著作は草稿本が多いのであるが、その料紙は反故が使われることが多く、紙背ば

かりではなく、手紙部分の余白を埋めるように書き尽くすもの、紙片を繋いで書いているものもあり、それらを順序どおり留めていたはずの糊や糸が外れてしまったため、本の体裁を成していないものが多いことが、読みにくさに拍車をかけている。さらに、速記を心がけた彼の文字もきわめて難読である。湛睿の著作の研究には、まず手のかかる復元作業が必要なのである。

『随自意抄』（以下、本書）は、復元作業の端緒についたばかりではあるが、本稿の目的として、本書の概要を述べ、性格を考察する。筆者にとって、湛睿が掲げた「随自意」という研究課題は大乘仏教研究のテーマとして興味深く、日本中世における一学僧の研究の一端を垣間見ることができると考えたためである。

二 二種の『随自意抄』

本書には、湛睿の草稿とその書写本の二種がある。草稿本

湛睿著『随意抄』について（道津）

は現存一八冊で、前述のごとく、紙背文書やさまざまな大きさの紙片を使用しているため、法量は縦二六〇～三〇cm、横一八〇～二〇cmと一定ではなく、装丁は表面の手紙を隠すため袋綴となっている。表紙中央に書名、その右下に副題が記され、表紙右下に「湛睿」の署名がある。一方、書写本には、良継、澄海、英禪（いずれも称名寺住僧）の書写本と心観、通識、英禪の手沢本、そして書写者未詳の写本がある。⁽⁵⁾法量は草稿とほぼ同じであるが、清書にふさわしく料紙に紙背が使用されることはなく綴葉装である。書写本にも副題を所定の位置に記すという約束事が守られている。そこで、この副題を頼りに、両種を比較すると、本来、『随意抄』は二三以上の副題を持つ大著であったことがわかる。⁽⁶⁾

〈草稿本〉

- ①「諸仏同説／付法花」②「無出家故」③「縁起通因／真理一多／一法広狭／瑜伽五姓／前三果受易」④「初地即捨」⑤「八九識」⑥「託事門」⑦「別教行布」⑧「三身常住」⑨「終教地前断惑」⑩「撰論十義」⑪「宝性論断善闡提／十住前発戒／三賢断惑／終教初経断末那識哉／成所作智通本後二智哉／龍樹龍宮見三本相／説時前後」⑫「頓漸無明」⑬「初受戒位分」⑭「不離菩提樹」⑮「六千比丘」⑯「性起」⑰「花嚴経出家菩薩行儀」⑱「（ナシ）」〈書写・手沢本〉（ただし、草稿本と重複のものは除く）
 ⑲「初発心菩薩」⑳「先照高山」㉑「不無行布／八識事」㉒「唯信無解」㉓「無明因縁」（通し番号は仮）

また、本書が湛睿の自著として積極的に書写されていたこ

とは、書写本の奥書から伺える。例えば、良継が書写した「真理一多／瑜伽五姓／前三果受易」の奥書には、「観応三年六月廿九日 良継／雖為悪筆、末代仏法興隆、金沢称名寺湛睿長老御草以正本写之、蒲利谷住侶兵部房良継」とあり、澄海の書写本の中には「文和二年三月十一日 金沢之睿公長老之以御自筆本書写了、澄海之（三／七）」と書かれた奥書があり、英禪の書写本には「観応三年八月九日 於金沢寺香積院書写了英禪／今日者御下向以後既三十一日成也」という奥書を持つものがある。

三 『随意抄』について

さて、筆者が本書について考える契機は、「撰論十義」と「性起」の副題を持つ二冊の『随意抄』草稿本の表紙を見た時である。二冊はもともと『愚案抄』という別タイトルがついていたが、湛睿自身が『随意抄』と書き改めている。『愚案抄』は湛睿の草稿本三冊が現存しており、『随意抄』と装丁、法量共にたいへんよく似ている。似ているのは、形状ばかりでなく、本文の構成も酷似している。両書とも、まず「問」のみを列挙し、続けて一問ずつ「問」「答」「重難」「答」と書き連ねる。⁽⁷⁾とすると、前の二冊は、そのテーマから『愚案抄』ではなく本書に組み入れるのがふさわしいと考えられたのではないだろうか。そこで、筆者は本書を、湛睿の「随

自意」に関する研究成果を記したものと仮定するのである。

「随自意」について述べる代表的な例は、『大般涅槃經』(以下、『涅槃經』)迦葉菩薩品であろう。本稿では作業上、曇無讖訳『涅槃經』に限定して概観する。迦葉菩薩品十二之三には、随自意、随他意、随自他意の、いわゆる三語が説かれるが、この段落の冒頭にあるように、これらは十二部經の範囲に限定される。そして、「随自意」は「一切衆生悉有仏性」なので、一切衆生は不断不滅であり、かつ最上の悟りを得ると説く仏説と位置づけられる。

善男子、如我所説十二部經、或随自意説、或随他意説、或随自他意説。(中略)善男子、我常宣説一切衆生悉有仏性、是名随自意説。一切衆生不断不滅乃至得阿耨多羅三藐三菩提、是名随自意説。⁽⁸⁾

「一切衆生悉有仏性」という「随自意」の語は、衆生にも後身の菩薩にも二乗其余の菩薩にも理解できない、と続く同品十二之四では、仏性を有する一切衆生の対立概念としての一闡提を取り上げる。⁽⁹⁾そして、この章の末尾には、

善男子、夫仏性者、不名一法、不名十法、不名百法、不名千法、不名万法。未得阿耨多羅三藐三菩提時、一切善不善無記尽名仏性。如来或時因中説果果中説因。是名如来随自意説。⁽¹⁰⁾

とあり、最上の悟りを得る以前から善不善無記の全てが仏性であることを、因のうちに果を説き、果のうちに因を説くような方法で如来は語っており、それを「随自意」の語と分類

湛睿著『随自意抄』について(道津)

していることがわかる。

つまり、「随自意」について考察する目的は、自明の理であり、有無や善不善の判断不要であるところの「仏性」の存在を理解できる菩薩となるためといえるだろう。そのためには、①「随自意」に説かれた經典とはどれか、②「随自意」の語を理解できる菩薩となるための方法は何か、③無であり不善であるはずの一闡提とは何か、といった問題を解決する必要がある。

「随自意」というテーマを論じた中国の教学は、天台教学と華嚴教学である。湛睿には天台教学を熱心に学んだ形跡が、現存する資料からはあまり見られない。⁽¹¹⁾となれば、湛睿の「随自意」研究は、華嚴教学の一テーマとして選ばれたとみてよい。そうであるならば、前述の「随自意」に関する問題点①は、『華嚴經』が含まれるか否かを論じればよく、同②は華嚴教学において提示されている菩薩の資質や受戒、思想理解が、「随自意」の語を理解できる菩薩となるための正しい方法であることを論じればよい。問題点①については、清涼澄観(七三八〜八三九)が『華嚴經随疏演義鈔』(以下、『演義鈔』)巻九に次のように述べている。

若欲判者、当漸開之。且分為二。一方便教、二真實教。故法華云、開方便門示真實相。亦即半滿。又方便即随他意語、真實即随自意語。又方便是三乘、真實是一乘。然諸經中对小顕大。即以二乗為

湛睿著『隨自意抄』について（道津）

方便、大乘為真実。若対権顕実、則以三乘為方便、一乘為真実。則於方便之中更分為二。一小乘、二大乘。就真実中亦分為二。一行布、二円融。行布即始終之教、円融即是円教。又小乘居然是別、大乘之中有多差別。一直顯一乘、如華嚴。二開權顕実、如法華。三會権帰実、如涅槃。四斥権讃実、如浄名思益。五権実双明、如諸般若。六帶権説実、亦如般若。七帶実明権、亦如般若。勝鬘小似法華、央掘小似涅槃。於上七中有似其類之經、各以類攝。若就大乘分宗。亦可有四。一法相差別宗、多説相故。二相想俱絶宗、多約性故。三性相無礙宗、事理相即故。四円融具德宗、以理融事故。故如来聖教意趣無辺、不可局執。今且依於古勢。如疏明耳。

すなわち、「隨自意」の語は真実一乘に分類される、行布・円融あるいは始教終教・円教を説く「華嚴」である、と定義しているのである。湛睿は、これを追認する証明を『隨自意抄』のなかで行ったとみられる。例えば、「別教行布」の表紙裏に書かれた冒頭の問を、「問、別教一乘意偏明円融相撰之玄旨歟、為当存行布差別之法相歟」とするのは、前述の『演義鈔』をうけたものに他ならない。また、「諸仏同説」の現状一紙目にある問答は「問、三世十方出世成道之仏、悉説花嚴經可云々々、答、諸仏皆悉可説令始也、何之不明、」とあり、『華嚴經』のゆるぎなき「仏説」論を展開していく様子が見受けられる。

『隨自意抄』のテーマは、そのほとんどが問題点②に関して設定されている。例えば、「終教意自在能断留故不断末那

煩惱事」には、「問、終教大乘意、初發心住位能伏末那相應之煩惱障可云哉」の問いに「答、此事雖難思且存申、一義者終教意、初住菩薩觀智殊勝、深伏一切人執煩惱、雖自在可能断之、故不断之智力備之、縱雖末那相應煩惱、何有残而不伏之乎」と答えて、終教に分類される菩薩は初住であっても、末那識相應の煩惱も残っていないと、菩薩の資質を述べている。これには当然、五姓各別論などとの整合性が必要となるため「瑜伽五姓」という一章を設けている。また、「初学戒位分」の「問、香象大師意、於十信即前之凡夫許發心受戒之義歟」に対し、「答、凡菩薩戒者以菩提心為体、然於因果道理決定、深信之位是名十信、故正即以此十信發信為初受戒之本也」と答えるという形で菩薩固有の受戒や戒体の存在を論じている。さらに、十玄門の託事顯法生解門を「自宗意明事云、円融広有十億聖門中、或有彼此相望一多互具成即入無碍之門、或有一々諸法各別自具無尽法界之門、此等義雖諸門内、一々兼具、」と説く「託事門」は、いうまでもなく、縁起説を華嚴教学で理解する方法である。

さて、問題点③の一闡提について、湛睿は、『大般涅槃經』をベースに考察してはいないことが、「宝性論断善闡提」の副題提示によってわかる。下田正弘氏⁽¹³⁾によれば、一闡提の「限定された属性を排除することに専ら仏性の意味が存在する」ことになってしまった『涅槃經』における不都合を、『究竟

一乗宝性論』（以下、『宝性論』）は「如来蔵・仏性」の意味を拡大することで解決している。」といい、『宝性論』は「善・悪を含めて「如来蔵」と言う一つの概念で説明をつけ得るという点から、基本的に一闡提を必要としない理論構造になっている」と指摘する。この『宝性論』に基づき一闡提を考察した湛睿の結論は、想像がつくというものである。湛睿は、「宝性論断善闡提」の冒頭で「問、宝性論意、断善闡提之外、有無性闡提、可云、」という設問をしている。一闡提を断善闡提と無性闡提の二種に区別しているわけだが、これは基の『成唯識論掌中樞要』に「合経及論闡提有三。一断善根、二大悲、三無性⁽¹⁴⁾。」と説くところから来ていると思われる。この③に關しては、筆者が本書を手取るきっかけとなった「撰論十義」も合わせて読解する必要があるかもしれない。

以上のように、本書は「随意意」を研究テーマとした、大乘仏教の研究書であることを概観した上で、今後の課題を述べたい。

四 今後の課題

前述のとおり、湛睿の草稿本の現状は、仮に束ねてあるだけの状態なので、研究材料とするまでにはいくつかの段階を経る必要がある。

まずは、草稿本の確定のため、書写本を全て翻刻する必要

がある。それを目安に同じ副題を持つ草稿本の各紙の順序を整えて、製本する。残った草稿本と、副題の重複していない書写本を比べて、同一の本紙があれば、書写本の原本として、新たな草稿本を形成する。いずれにも該当しない本紙は、あれこれ組み合わせに頭をひねるしかない。

草稿本の形がある程度見えたところで、こちらの翻刻を行い、考察の準備をする。そして、ようやく読む作業に入るわけで、道のりは遠く、課題は多い。とはいえ、概観しただけでも、なかなか興味深い資料であることがわかったため、今後も作業を継続していきたいと考えている。

1 『律苑僧宝伝』卷一四（大日本仏教全書「以下、日仏全一〇五 一五七頁」）には、

本如睿律師伝

律師諱湛睿、号本如。自其少時有奇心遠識。出家入戒壇円戒爾律師之門、学毘尼、雜華。爾之門人、能得其奥者。唯師与盛誉而已。出世鎌倉称名律寺、講揚宗教。曾無告倦、登門受業者極多。皆広偉之龍象也。師後終没無知時代。所著有教理鈔及纂釈等若干卷。

とある。爾律師とは久米田寺の禪爾、教理鈔とは『大乘起心論義記教理鈔』、纂釈とは『華嚴五教章纂釈』または『華嚴演義鈔纂釈』をさす。そのほか、『招提千載伝記』卷中之二 明律篇（日仏全 一〇五 五五頁）、『本朝高僧伝』卷一七 淨慧二之十四（日仏全 一〇二 二五四頁）にも記事がある。

湛睿著『随意抄』について（道津）

湛睿著『随意抄』について（道津）

- 2 大屋徳城「金沢称名寺三世本如房湛睿—金沢文庫新出の史料に拠る事跡並に学風の研究」（『大谷学報』一五号一所収一九三四年一月）、「同（承前）」（同一五号三所収一九三四年十月）、「同（続）」（同一五号四所収一九三四年十二月）。
- 3 納富常天「湛睿の研究」（『金沢文庫資料の研究』第四編四四五—五二五頁 法蔵館 昭和五十七年六月）にまともについて。また、「湛睿の事績」（『駒澤大学仏教学部論集』第一六号一九三—二四四頁 一九八五年十月）には、著作等の奥書を抜き出し、年譜形式で整理されている。
- 4 『学僧 湛睿の軌跡』六四頁（神奈川県立金沢文庫 二〇〇七年）参照。
- 5 発表後、納富氏より、東大寺に同名の写本があることをご教示いただいた。筆者未見のため、注記にとどめる。納富氏に感謝申し上げます。
- 6 各本の資料番号は次のとおりである。なお、神奈川県立金沢文庫の図書閲覧室において、現状を記録したマイクロフィルムからの紙焼製本を閲覧することができる。その請求番号と資料番号は、ほぼ一致している。
 - ①六五函一号一 ②六五函一号二 ③六五函一号三 ④六五函一号四 ⑤六五函一号五 ⑥六五函一号六 ⑦六五函一号七 ⑧六五函一号八 ⑨六五函一号九 ⑩六五函一号一〇 ⑪六五函一号一一 ⑫六五函一号一二 ⑬六五函一号一三 ⑭六五函一号一四 ⑮六五函一号一五 ⑯六五函一号一六 ⑰六五函一号一七 ⑱六五函一号一八 ⑲六五函一号一九 ⑳六五函一号二〇 ㉑六五函一号二一 ㉒六五函一号二二 ㉓六五函一号二三 ㉔六五函一号二四 ㉕六五函一号二五 ㉖六五函一号二六 ㉗六五函一号二七 ㉘六五函一号二八 ㉙六五函一号二九 ㉚六五函一号三〇 ㉛六五函一号三一 ㉜六五函一号三二 ㉝六五函一号三三 ㉞六五函一号三四 ㉟六五函一号三五 ㊱六五函一号三六 ㊲六五函一号三七 ㊳六五函一号三八 ㊴六五函一号三九 ㊵六五函一号四〇 ㊶六五函一号四一 ㊷六五函一号四二 ㊸六五函一号四三 ㊹六五函一号四四 ㊺六五函一号四五 ㊻六五函一号四六 ㊼六五函一号四七 ㊽六五函一号四八 ㊾六五函一号四九 ㊿六五函一号五〇

7 発表後、袁輪顕量氏より、本書の性格について論議の記録の

可能性をご指摘いただいた。現在までのところ、日取りや講者・問者にあたる人名等の記述は見当たらないが、今後の作業における留意点としたい。

- 8 『涅槃経』卷三五（大正新修大蔵経「以下、大正蔵」一二五七三a—c）。

- 9 『涅槃経』卷三六（大正蔵一二五七四b—c）。

- 10 『涅槃経』卷三六（大正蔵一二五八〇c）。

- 11 前掲（3）『金沢文庫資料の研究』四六二—四七二頁にわたり、納富氏が「金沢文庫所蔵の湛睿関係資料を教学的・類別的に列記」している。華嚴関係を一二八部と数えるに比し、天台関係はわずかに五部と少ない。

- 12 大正蔵三六 六九a。

- 13 下田正弘「『大般涅槃経』の思想構造——闡提の問題について」（『仏教学』第二七号 仏教思想学会 一九八九年九月）。

- 14 大正蔵四三 六一a。

〈キーワード〉 湛睿、称名寺、『随意抄』、三語、華嚴教学、一闡提

（神奈川県立金沢文庫主任学芸員）